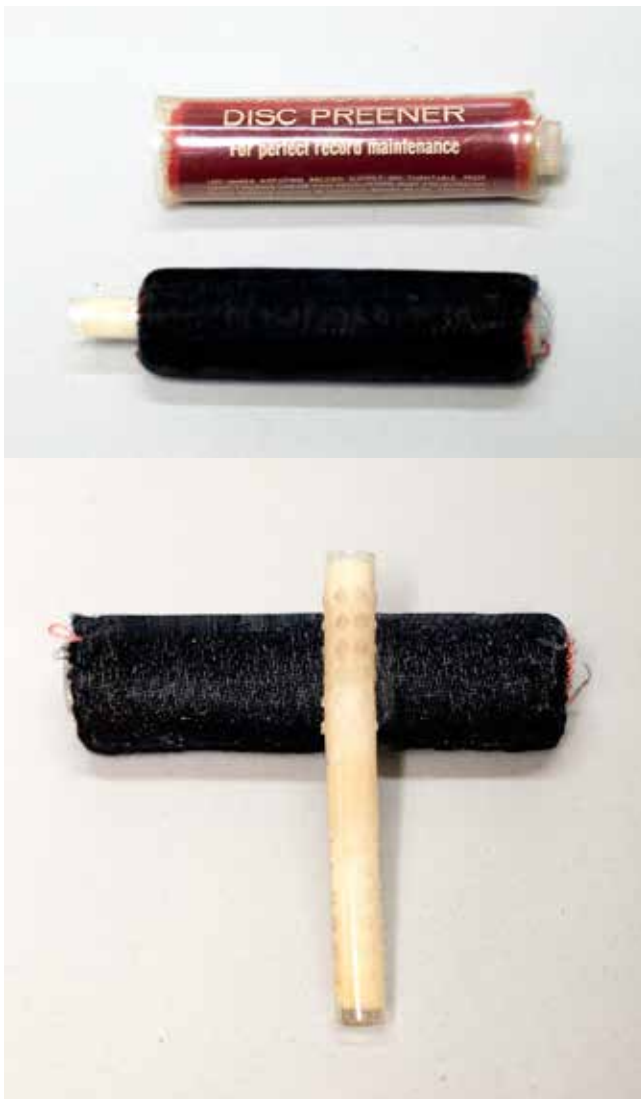


レコードの洗浄

前章での課題「レコードの洗浄」がほぼ満足出来るレベルに達したのでレポートしておきます。毎度のことながら暗中模索・試行錯誤の繰り返し。今回はハード面のみです。

1. スクラッチノイズ



バンビ、さりげなく、ニーニーなどよく出入りしていた(居眠りに……)ジャズ喫茶ではレコードの演奏前に必ず行うルーティンワークがありました。それはジャケットから出したレコードをWattsのPreenerで埃を取り、演奏中のレコードの説明を兼ねて、ジャケットをお客から見やすい棚に立て掛けてくれます。この後、徐々にレコードに針を落とします。

今は入手出来なくなったPreenerですが拙宅では未だに健在。赤・黒ペアで40有余年、頓らお皿を磨いてきました。プレーヤーやアンプ、スピーカーは何度も入れ替えを繰り返しましたが、Preenerだけは変わらず。何時もアームの横に鎮座しています。当然今回のデジタル変換用の録音でもPreenerが活躍したことは言うまでもありません。

表面を赤や黒の天鵞絨で巻いた円筒の中に、ウレタンフォームの入った小さな穴が空いたポリ筒が入っています。このウレタンフォームを水で浸して天鵞絨筒の表面をこすり、埃を取り除いてからターンテーブルに載せたレコード盤をこのPreenerで拭い、盤面の埃を取ります。レコードクリーナーは各社から色んなものが出ていましたが、Jazzファンにはこれが必需品でした。

これでも取れない細かいカビ・埃を除去するため、レコードを洗浄することにしました。

■ Bell Dream RC-727



ドイツ製のレコード洗浄器です。

洗浄タンクに専用洗浄液を入れ、レーベル保護カバーを兼ねたクランプでレコード盤を挟み、タンクに浸けて盤面外側を手のひらで回転させると、タンクのスリットに取り付けたブラシが、洗浄液で浮き上がったカビ・埃を除去する構造になっています。洗浄が終われば取り出し、クランプを取り外すのですが、これが大変。洗浄液で手が滑りなかなか外れません。悪戦苦闘、半時間ぐらいかけてようやく取り外すことが出来ました。毎回この長時間は耐え切れないので、またもや工作と相なりました。

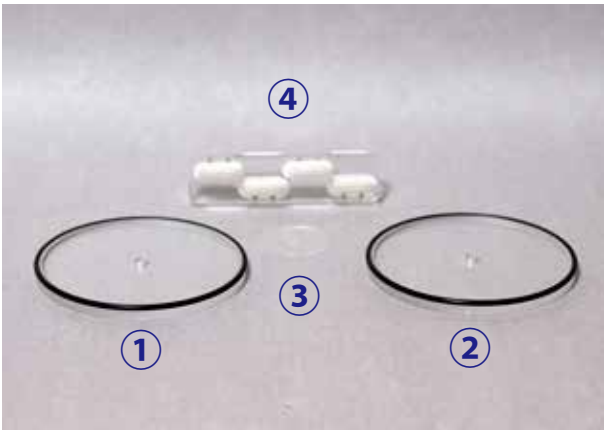
レコード(下図の赤線)を挟んだクランプを上下の取り外し台に載せ、上部のクランプ外しを廻せば簡単にレコードが取り外せます。材料は余った18mm支那合板とシリコンのゴム脚。

このクリーナーは便利ですが一つだけ問題があります。それはタンクからレコードを取り出すときに中のブラシが盤面から離れないため、盤面に擦過傷をつけてしまいます。音質には全く問題ないのですが、貴重なレコードなので許し難く処分しました。

レコード1枚のクリーニング代が18,000円とゴム脚代で高価な勉強になりました。

こうなれば意地でも解決したくなるのが悲しい性。例によってWebを徘徊すると色々なクリーナーがあります。埃を取るもの、静電気を取るものと裾は1,000円ぐらいのクリーナーから15万円もする洗浄機まで。本八幡の中古レコード店ワークスにあったので覗きに行きました。これは素晴らしい!。全自動でLPを20分程度で洗浄・静電気除去をしてくれます。さすがに手が出ないのでさすさ帰ってきました。おまけに中古レコードを買う羽目に……。何をやっているのだろう。

■ レーベルカバー / LC-1



例によってWebで見つけ早速購入しました。
有限会社 トークシステムがネット販売をしていました。左記4点で15,000円。

- ①、②レーベルカバー上下1セット
- ③ドーナツ盤アダプター
- ④洗浄ブラシ



1. 2枚のレーベルカバーのOリング面の間
にレコード盤を挟み付属のボルトナット
で取り付けます。

2. 側面



3. 洗浄テーブルにレコードを乗せ、中性洗
剤を塗布し盤面をブラシで洗います。
洗浄が終われば水洗して陰干しします。

ホームセンターで植木鉢用のトレーとすべり
止めクロスを買ってきて、洗浄テーブルを作
りました。これで盤面に傷をつける心配がな
くなりました。

■ 静電気の除去

盤面の汚れやカビは洗浄すれば取れますが静電気はそのまま残っています。これではせっかくの努力が無駄になるので、仕上げに静電気帯電防止材を塗布します。レコードを新聞紙等の上ののせて作業をすると細かな紙粉が付着するので、今度は仕上げ用テーブルを作りました。



材料は余った18mm支那合板とターンテーブル、ゴム脚です。

ターンテーブルはオークションでジャンク（動かない不良品）のレコードプレーヤーを500円で落札し、ターンテーブル、ゴムマットとシャフトを取り外しました。ベースは洗浄液等で濡れますので油性ラッカーニスを塗布しました。この上に洗浄済みのレコードを載せスタイラスのトレースと同方向にターンテーブルを廻して作業します。



<各種クリーナー>

Leiqwa (レイカ) バランスウォッシャー

- ①カビ・汚れ除去液
- ②仕上げ液特徴：A・B液各200ml入り、
- ③Visco33 クリーニングクロス
- ④Permostat 帯電防止液
- ⑤同クリーニングパット

洗浄済みのレコードを仕上げテーブルに載せ④Permostata静電防止液を吹き着け⑤クリーニングパッドで盤面に伸ばしながら拭きとります。表面が終われば同様に裏面にも塗布します。この場合、聴くのは片面だけであっても両面に塗布しないと効果が半減します。もったいないですが表裏共に塗布します。



盤面が洗浄するほど汚れていないレコードには、前頁のレーベルカバーでの洗浄作業をスキップしてバランスウォシャーで簡易洗浄を行います。

1. 仕上げテーブルにレコードを載せます。
2. 少量の①レイカバランスウォッシャーA液を盤面に垂らします。
3. ③Visco33クリーニングクロスでバランスウォッシャーA液をスタイラスのトレース方向と同方向に盤面に伸ばす用に塗布し、乾燥させます。
4. 同様に少量の②レイカバランスウォッシャーB液を盤面に垂らします。
5. (3)同様にVisco33クリーニングクロスでバランスウォッシャーB液を塗布します。

※これで洗浄作業は終わりです。使用するクリーニングクロスを性質の異なるA・B両液で共通使用すると、両液が混合してしまい効果がなくなります。もったいないですがA・B各液毎にクリーニングクロスを交換して下さい。

無駄をなくすため、レコードのクリーニング・帯電防止処理は、出来るだけ多くのレコードを一気に処理するのが経済的です。大量にクリーニングをすると今度は乾燥台が必要になって来ます。小生は乾燥台にCDスタンドを代用しています。水分を含みますので金属・プラスチック製のものがお勧めです。

クリーニングが終了すれば前頁の④Permostatで帯電防止作業をして完了です。



金属製のCDスタンド(皿立てかも……)にレコードを立て乾燥させます。

洗浄後と静電防止材の塗布後と、最低二度はお世話になりますのでこのようなスタンドがあれば便利です。

但し、このスタンドは高さが低くて7" EPレコードしか立てられません。10", 12"のLPには使用出来ないなので、現在は壁際にもたせ立てて乾燥しています。そのうちにLP用スタンドを作らねばなりません。得意の木工は水分を吸収するのでカビの温床になり使用できません。金属加工はアークがないので無理、残るはアクリルだけです。又々、頭の痛い問題発生です。

■スタイラスのクリーニング

作業を終えたレコードを試聴してみました。完全とは言えませんがプチノイズが減少しているのが体感出来ました。かなりVRを上げても気にならなくなりました。

早速デジタル録音してMacで試聴してみました。これでSound itでイコライザーをかける必要がなくなりました。まずは満足。

洗浄と云えばレコード盤ばかりに注意が偏りますが、実はスタイラス(レコード針)にも問題はあります。レコードを演奏すると云うことは音溝をスタイラスがトレースすると云うことで、このときに盤面の埃やカビが針先に付着します。長時間この状態で放置しておくと針先で埃やカビが凝固してしまい除去することができなくなります。こんな針でレコードを演奏すると盤面を削っているようなもので、満足な再製は望めません。



左のカートリッジは日常的に使用しているものです。この他にスタイラスの供給が止まったもの、モノラル等があります。今、録音用に使用しているのはShure V15 Type 3でJazz向きです。

左から…

Denon DL-301 II/MC, Technics 205MK3/MM,
Audio Technica AT32E/MC,
Audio Technica AT14 Sa/MM,
Empire 4000DL/MM



Audio TechnicaのStylus Cleenerです。

ブラシで針先の付着した埃・カビを取り、クリーナーで洗浄します。

2. 針飛びの修復

最近はあまり耳にしなくなったが「壊れたレコードのように……」という揶揄がよく聞かれました。「これは同じことを何度も繰り返す」ことのとえですが、アナログレコードがすたれるのに合わせるように、このような揶揄は殆ど聞かれなくなっていました。

レコードの取り扱いには万全の注意をはらっていても、うっかり傷つけてしまうことも、まゝあります。こうなればシェルの上に1円玉を載せて重しをするか、傷の手前からシェル(カートリッジをアームに固定するパーツ)に指を沿え、「プツン」と鳴ると同時に中に押しあげます。うまくやれば「繰り返し、針飛び」は避けられます。小生は高校時代は放送部でミキサーをやっていたのでいつもこの作業をやっていました。今は個人でもデジタル編集が可能になったので、傷の前後を複数録っておけば後で繋ぎ合わせ出来ます。



左図は傷ついて針飛びを起こす箇所を修復しています。修復といっても傷ついて狭められた音溝を爪楊枝で広げるだけで、音そのものを修復できる訳ではありません。

広げられた音溝の左右が高くなり、隔壁になれば針飛びは防げます。音はなくなっている場合が多いですが、波形ソフトで途切れた部分は前後の音と繋ぎ合わせれば、目立たなくなります。

概してアナログステレオ機器はデリケートな製品が多いです。初期性能を維持しようとすると丁寧な取り扱い、こまめなメンテナンス、それに定期的なオーバーホールが欠かせません。現行の新製品で小生には魅力的なものがなく、頓らオーバーホールの繰り返しです。

デジタル変換を始めてから知らされたのですが、昔は音楽編集はMacの独壇場でした。Mac Proの音声回路はお粗末なので、Snow Leopard対応のサウンドカードを探すのですが全く見当たりません。ONKYOがSE-200PCI LTDのPCI Express/Macを出してくれるとすぐに購入するのですが、目下開発の予定はないそうです。当分、Edirolのお世話になりそうです。

■洗淨・帯電防止効果

作業を終えたレコードを試聴してみました。完全とは言えませんがプチノイズが減少しているのが体感出来ました。かなりVRを上げても気にならなくなりました。早速デジタル録音してMacで試聴してみました。これでSound itでイコライザーをかける必要がなくなりました。まずは満足。

<余談>

以前知人からソノシートのデジタル化を頼まれました。何時も通りモニター用プレーヤーで試聴するとプチノイズが大きかったので洗淨することにしました。ソノシートの材料はビニールフィルムでレーベルは盤面に直接印刷されています。レーベルの印刷はシルク印刷だろうと判断し、いつもレコードの洗淨時に使用するレーベルカバーを着けずに、洗淨台に載せたソノシートにダイレクに洗剤(ママレモン)を塗布してブラッシングしました。

乾燥後に帯電防止液を塗布しようとして気付きました。何と「レーベルの文字が欠けている」ではありませんか！。ブラッシングは音溝に沿って軽く行っているのに削り取る程の力が入っていません。考えられるのは洗剤で印刷インキが溶けたか、もしくはビニールフィルムへのインキの喰い付きが、経年劣化で弱くなっていたかのかも知れません。

何はともあれ小生の手抜きで文字を落としたのは事実なので平謝りに謝りました。この場を借りて改めてお詫び申し上げます。(陳謝)。

<関連リンク>

各種クリーナー: [オーディオショップ・サウンドハイツ](#)

レーベルカバー: [有限会社 トークシステム](#)

中古レコード店: [ワークス](#)

